

# 日本語助数詞の範囲

## —名詞と助数詞の連続性—

田中 佑

キーワード：助数詞、名詞、数量表現、カテゴリー間の連続性

### 1. はじめに

「助数詞」は日本語で数を表現する際に用いられる要素として広く認識されている。しかし、その周辺例をどこまで助数詞と認めるかについては、厳密な議論がなされてきたとはいえない。具体例を示して考えてみる。下に示す例で数詞に後接している要素は助数詞と呼べるであろうか(以下、出典を付した例文の下線はすべて引用者による)。

- (1) 高校野球を 4 試合観戦した後、トンボ返りで戻った。 (朝日 2012/07/30)
- (2) 目の上のたんこぶをどうにもできない塚本ら 3 社長も非力だが、お上が民間企業の首脳人事に不明朗に介入することは、あってはならないことである。  
(AERA2010/05/31)
- (3) 京都、大阪、神戸の 3 都市に価格のピークが分散している。 (週刊 2006/06/23)

上例下線部の位置付けは先行研究においても意見が分かれる。それは従来の日本語研究において「数詞が直接に名詞を修飾することなく、常に助数詞をとって数量的表現をなす(奥津(1969:42))」を前提とすることが多かったためであるといえる。しかし、(1)~(3)が日本語として許容されるならば、それは再検討されるべきである。

そこで本稿では、先行研究における助数詞の定義の検証をとおして、日本語助数詞の範囲についての検討を行う。結論を先に述べるならば、日本語の助数詞の認定には、「任意の数詞と結合して数量詞を成し、副詞的な位置に生起することができる」という形態統語論的な観点を導入すべきであることを主張する。

### 2. 先行研究と問題点

#### 2.1 助数詞の定義について

まず、先行研究における助数詞の定義を記す。

- 数を表わす語にそえて、数え量られるものがどんな性質・種類のものであるかを示す、一種の接尾語(西尾(1977:132))

- 1. 数詞に直結する
  2. 「数詞+助数詞」によって数を指定される名詞と共起し得る
  3. 数える上で「一」となる単位を指定する(Downing(1995:16-17)<sup>1)</sup>)
- 度量衡や時間等の単位を表さず、独立して用いることができない、数詞に直接付加される接辞(飯田(1999:7))

これらをまとめたものを【表 1】に記す。なお、飯田(1999)は数詞と直結可能な要素を「広義の助数詞」、そこから「度量衡や時間等を表す単位」と「形態的独立性を持つ語」を除いたものを「狭義の助数詞」とする。上述の定義は「狭義の助数詞」のものであるが、数詞と直結する要素すべてを助数詞とする捉え方は、後述の成田(1990)に近いといえる。

【表 1】 先行研究における助数詞認定の観点

		西尾 (1977)	Downing (1995)	飯田 (1999)
形態論的基準	数詞に直結	○	○	○
	形態的非独立性	○		△
統語論的基準	指示対象名詞との共起		○	
意味的特徴	対象の性質などの表示	○		
	最小単位の指定		○	

本稿との関連で、特に言及すべきは Downing(1995)である。Downing(1995:14-15)は助数詞を定義する際の問題の一つとして“unclassified nouns”を挙げる。“unclassified nouns”とは、主に時間や色、種、階級、地域、社会的単位といった抽象的な対象を指示し、「数詞+助数詞」との共起に加え、数詞と直結することもできる名詞を指す。また、“unclassified nouns”は助数詞(“true classifiers”)と“classified nouns”の中間に位置付けられ、三者に明確な境界を設けることはできないとする。Downing(1995)が挙げる“unclassified nouns”の例を下に記す。

- (4)a. “classified” use: ひと-いろ(‘one color’)  
 b. noun use : ひとつのいろ(‘one color’) (Downing(1995:15)一部改)

Downing(1995)は上述の三者の連続性を認めながらも、日本語における助数詞というカテゴリーを明確にするために、定義に「数詞+助数詞」によって数を指定される名詞と共起し得る」という統語的観点を加え、“unclassified nouns”は「日が3日経った<sup>2)</sup>」のように

<sup>1</sup> ここで示したものは Downing(1995)にある定義とそれに関する議論を要約したものである。

<sup>2</sup> 「日(か)」を「日(ひ)」と同じ名詞と考えることには問題があると思われる。

許容度が落ちることから、助数詞には含めないとする。

## 2.2 周辺の事例の位置付けについて<sup>3</sup>

成田(1990)は数詞と直結可能な独立形態素を「名詞と同形の助数詞」とする。成田(1990)が挙げている語をまとめたものが【表2】である<sup>4</sup>。

【表2】成田(1990)のリスト

【A】分類項目・ 構成要素 (単位的なもの)	行政区画などの 空間	都道府県、県、郡、市町村、市、町、区、選挙区、 集落、町内、地方、地域、区域、区画、工業地帯、 地点、会場、部屋、教室	
	組織・集団	大学、病院、百貨店、デパート、画廊、書店 ----- 学部、学科、学年、学級、クラス、グループ、ブロック、 チーム、班、委員会、部族、家族 ----- 連隊、部隊、小隊 ----- 部、課	
		抽象的分類項目	系統、系列、分野、種類、要素
		様々な分野での 構成要素・単位	単位、教科、科目、路線、回路、場面、コース、 レーン、チャンネル、バンド [周波数帯域のこと]、 レース、機能、番組、車線 ----- 章、節、項、文、段落、行、句、文字、字、画、音節 ----- 図形、直線、辺、角(かく)、点
	時間	学期	
【B】役職役割(人)	組織の構成員	委員、教授、先生、部長、課長、係長、大臣、議員、 長老、審判 ----- その他	
	その他	美人、奇人、名人	
【C】容器	容器	さら、はこ、たる、ふくろ、缶、瓶、パック、ケース ----- 容器的	
	容器的	くし(串)、はち(鉢) [植木など]	
【D】その他	a	しな(品)、め(目) [編物などで]、曲、票 ----- b	
	b	かけら、つぶ、たば	

<sup>3</sup> 数詞と名詞が直結するという事例に対して最も早くに考察を加えているのは、管見の限り、Bacus(1972)である。また、同様の現象を扱ったその他の研究として Kim(1995)、天崎(2004)を挙げることができる。しかし、これらは「助数詞」というカテゴリーについて言及していないため、ここでは取り上げない。

<sup>4</sup> 成田(1990)と同趣旨で、より多くのデータに基づいた研究に東条(2012)がある。東条(2012)は数詞と結合できる独立形態素のうち、不定数量を表す「何(なん)」を付すことができるものを「準助数詞」、できないものを「擬助数詞」と呼んで区別しているが、基本的にすべてを「名詞と同形の助数詞」として扱っているため、他の研究と同様、2.3節で述べる問題を含むといえる。

また、成田(1990)も、Downing(1995)同様、助数詞と「名詞と同形の助数詞」の間に連続性を認めている。

- (5) a. \*ことし、3大学の大学ができた。  
b. \*ことし、大学3大学ができた。  
c. \*ことし、大学が3大学できた。
- (6) a. ?2しなの品を届ける。  
b. ?品2しなを届ける。  
c. ?品を2しな届ける。
- (7) a. 千票の票を集める。  
b. 票千票を集める。  
c. 票を千票集める。

(成田(1990:4-5)一部改)<sup>5</sup>

成田(1990)は、【表2】の意味領域に基づく分類において、「グループA」や「グループB」は(5)に示すように数量詞として振る舞うことができないのに対し、「グループD/a」は、(6)(7)のような許容度の差は見られるものの、数量詞として機能し得ることを観察している。このことから【表2】のうち、「2皿の寿司」のように数えられる対象が別に存在する「グループC」「グループD/b」を除くと、 $B < A < D/a$ の順に助数詞らしきが増すとす。

### 2.3 問題点

西尾(1977)、成田(1990)、飯田(1999)は「日本語において名詞と数詞は直結できない」ことを前提としている点で共通している。しかし、【表2】の語群が名詞としての用法を持つことは明らかであり、それらが数詞と直結しているにもかかわらず、「日本語において名詞と数詞は直結できない」ことを前提とするのは問題である。また、【表2】の語すべてを助数詞と考えるのは直感にも反するだろう。

一方、「日本語において名詞と数詞は直結できない」ことを前提としない場合は異なる問題が生じる。それを端的に表す言及が平安時代の資料に現れる助数詞の用法を検討した峰岸(1966,1967)に見られる。

- 一方に自立的用法の名詞と見るべきものも存し、接尾語としての助数詞と名詞本来の用法との間の境界は、必ずしも明確でない(峰岸(1966:49))
- 形態的には同じく数詞<sup>6</sup>を構成するかに見える語であっても、その構成要素が<基数詞+名詞>からなるものと<基数+助数詞>からなるものとの境界は、現実の事例を処理するに際しては必ずしも分明ではない(峰岸(1967:47-48))

<sup>5</sup> 各例文の判定は成田(1990)による。

<sup>6</sup> 本稿の「数量表現」を指す。なお、本稿での「数量表現」と「数量詞」の関係は3.2節を参照されたい。

この問題を解決するためには、助数詞の認定に関して、「数詞と直結すること」以外の観点が必要となる。それを導入しているのが Downing(1995)である。

Downing(1995)の論理は、数詞と助数詞から成る数量詞は、それが関係を持つ名詞と共起してその数量的側面を表す。よって、数詞と直結する要素が助数詞であれば「数詞+x」は数量詞として、そうでなければ名詞(“unclassified nouns”を含む)として機能する。したがって、助数詞と名詞は連続的ではあるが、「数詞+x」の統語的な振舞いを確認することで助数詞と名詞を区別することができるはずとするものである。

この考え方には本稿も賛同する。しかし、そのための基準として Downing(1995)が提示している「数詞+助数詞」によって数を指定される名詞と共起し得る」という統語的基準には問題がある。次の例を見られたい。

(8) 目の上のたんこぶをどうにもできない塚本ら3社長も非力だが、お上が民間企業の首脳人事に不明朗に介入することは、あつてはならないことである。

(再掲=(2))

(9) 全国ご当地カレーの作り手たちが22日、「華麗(カレー)なる感謝祭」と銘打った催しを長崎県大村市など3地域で同時に開く。(朝日 2011/01/21)

(8)(9)において「数詞+x」は、複数接辞や並列詞が付加した名詞と共起している。このような文は【表 2】の語群のほとんどが成すことができるが、「数詞+助数詞」によって数を指定される名詞と共起し得る」という基準には抵触しない。Downing(1995)がこの基準を設けた意図は、数量詞の統語的制約を用いて、(8)(9)の語を含む“unclassified nouns”と助数詞を区別するためであった。しかし、上で示したように、Downing(1995)の統語的基準では両者を明確に区別することはできない。

### 3. 日本語における助数詞の定義と範囲

前節では、従来の研究が前提とすることが多かった「日本語において名詞と数詞は直結できない」という認識に検討の余地があること、また、そのような前提に立たずに統語的な観点を導入して助数詞を規定しようとした Downing(1995)も、その条件に問題があることを示した。本節では、Downing(1995)同様、日本語においても数詞と名詞は直結することを前提として、改めて助数詞の定義とそれが示す範囲を検討していく。

#### 3.1 形態論的基準

まず、先行研究において助数詞の形態論的基準として設定されている「数詞との直結」と「形態的独立性」について述べておく。

前者については、先述のとおり、それを満たすことのみで当該の要素を助数詞と認めることはできない。しかし、当然のことながら、助数詞は数詞と直結する要素であるため、

「数詞との直結」は必要条件として設定しておく必要がある。ここでは、「三銃士」や「七不思議」など、特定の数詞とのみ結合する例も考慮に入れ、「任意の数詞と直結」できることが助数詞を認定する基準の一つとなり得ると考える。

一方、「形態的独立性」については、助数詞に拘束形態素が多いことは確かであるが、「助数詞」というカテゴリーから独立形態素を排除する積極的な理由はない。

したがって、本稿では、助数詞を認定するための形態論的な基準は「任意の数詞と直結」のみを立てておく。

### 3.2 統語論的基準

Downing(1995)は、「数詞+x」において「x」は主要部であり、「x」が助数詞であれば数量詞が生成され、名詞であれば名詞が生成されると考える。本稿も同様の立場を取る。そしてここでは、任意の数詞と結合した「数詞+x」を「数量表現」、そのうち、「x」が助数詞のものを「数量詞」として区別しておく。

数量詞は、品詞論において、名詞の下位類に位置付けられることが多い。これは、「格助詞を従えて格成分として機能する」や「コンピュータを伴って述部となる」など、名詞と数量詞の統語的な分布が類似するためであるが、古くから指摘されているように、数量詞は副詞的な位置に生起できるのに対し、名詞は生起できない<sup>7</sup>という相違点が存在する。したがって、ここでは「副詞的位置への生起」を確認すれば、「数詞+x」が文中において数量詞として機能し得るかが明らかとなり、間接的に、「x」が助数詞か名詞かを示したことになる<sup>8</sup>と考える。

この観点から「数詞+名詞」を検討すると、成田(1990)が指摘している「器的なもの」(グループC)と「かけら」「つぶ」など(グループD/a)を除くと、副詞的位置で安定して用いることのできるものはそう多くはない。実例を収集できるものは以下に示す数例のみである<sup>8</sup>。

- (10) 高校野球を4試合観戦した後、トンボ返りで戻った。 (再掲=(1))
- (11) 6畳の間取りが11部屋ある。 (朝日 2012/07/05)
- (12) 2000年に美容学校の会社を起こし、いまではサロンを4店舗持つ。 (AERA 2009/04/20)
- (13) 年金に関して許せない連中が、日本に2種類いる。 (週刊 2011/11/04)

<sup>7</sup> 「今日」「昨年」「明日」などの時を表す名詞や再帰代名詞は副詞的な位置にも生起できる。しかし、これらは「\*2昨年」「\*3明日」「\*4自ら」などのように、数詞と結合することはできないため、ここでは、「数詞+名詞」は副詞的な位置に出られないと考える。

<sup>8</sup> 成田(1990)において「大学が3大学できた」を「このようなところが3大学できた」のように冗長性をなくすことで文の許容度が変化することが指摘されている。確かに、冗長性によって許容度が変化する可能性はある。しかし、「練習試合を3試合こなし」などのように、冗長であるにもかかわらず、日本語として許容されることの方が当該の現象を考える上では重要であるといえる。

さて、「副詞的位置への生起」は成田(1990)でも「数詞+x」の数量詞性、延いては、「x」の助数詞性を測ることのできるテストの一部として用いられている。しかし、本稿では、「数詞+x」が数量詞か数量表現か、延いては、「x」が助数詞か名詞かを二値的に決定するテストとして用いているため、位置付けが異なるといえる。

加えて、このテストならば、Downing(1995)の提案するテストで問題となった複数接辞や並列詞が付加した名詞と共起する場合でも、それが数量詞として機能しているかを明確に判断することができる。

- (13)a. また AP 通信によると、病氣療養中のカストロ前議長とは、7 日朝にリー氏ら 3 議員が面会したという。(朝日 2009/04/09)
- b. \*…、7 日朝にリー氏らが 3 議員面会したという。
- (14)a. 東京都立大学など 4 大学を廃止し、大都市問題に取り組む新大学を発足させる東京都が、目玉となる都市教養学部のコースについて、理念づくりの補強などを大手予備校の河合塾(本部・名古屋市)に委託する。(朝日 2003/12/05)
- b. \*東京都立大学などを 4 大学廃止し、…

以上の議論より、助数詞を認定するための統語論的な基準として「数量詞を成して、副詞的位置へ生起する」ことを立てることができる。これと上述の形態論的基準と合わせた(15)が、本稿が提案する日本語助数詞の定義である。

#### (15) 日本語助数詞の定義

任意の数詞と結合して数量詞を成し、副詞的な位置に生起できる語

(15)に基づくと、形態的独立性を有しながら数詞に直結する要素は、次のように二値的に分けられる。

#### (16) 数詞に直結する独立形態素

- a. 助数詞：さら、はこ、かけら、つぶ、試合、部屋、店舗、種類…
- b. 名詞：社長、議員、大学、都市、地域、病院、機能…

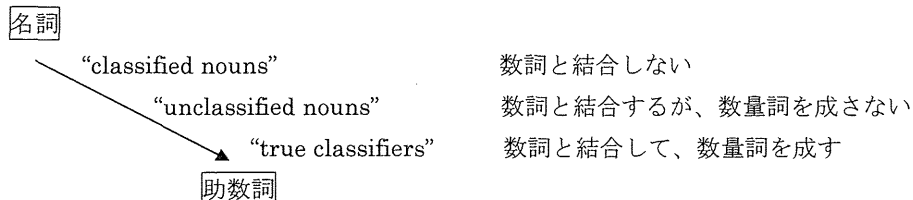
## 4. 名詞と助数詞の連続性

(15)を基準とした場合、助数詞と名詞は二値的に分けられる。しかし、本稿は両者の連続性を否定するわけではない。以下、本節では名詞と助数詞の連続性について議論を行う。

助数詞の中には「本来は名詞としての独立性をもっていたと認められるものも多い(池上(1971:331))」とされるなど、その連続的な関係性は古くから認められてきた。しかし、それを具体的に示そうとしたのは、管見では、成田(1990)、Downing(1995)のみである。

ここで、いま一度 Downing(1995)の示した連続性を確認する。Downing(1995)が示した連続体は助数詞(“true classifiers”)、“unclassified nouns”、“classified nouns”の三つから成るものであった。これらは、まず、数詞との結合可否で前二者と後者に分けられ、次に、数を指定される対象を支持する名詞との共起可否で助数詞と“unclassified nouns”に分けられる。

(17) Downing(1995)の名詞・助数詞間の連続性



しかし、この連続体には問題がある。成田(1990:3)などでも指摘されているが、数詞と結合可能な名詞は圧倒的に漢語が多い<sup>9</sup>。したがって、Downing(1995)の連続性は和語には名詞らしい語が多く、漢語には助数詞らしい語が多いことを予測する。しかし、そのようなことは考え難い。よって、本稿では、漢語系の名詞が数詞と結合しやすく、和語系の名詞が結合し難いのは、語種間の語形成力の違いであり、数詞との直結可否は助数詞らしさとは無関係であると考え。しかし、数詞と直結することは助数詞の特徴の一つであるため、直結可能なものは助数詞化する資格を持ち、そうでないものはその資格を持たないとしておく。

以下、数詞と直結可能な名詞に絞って議論を行う。

名詞と助数詞の連続性を考える場合、助数詞の定義との関連で論じた「数詞との直結」「形態的独立性」「副詞的位置へ生起」が有効的に機能する。「数詞との直結」はその連続体を成す語の選定の基準となり、「形態的独立性」は、それを持たない語が助数詞なのではなく、それを有する語が名詞であると考えらるならば、当該要素が名詞であることを示す指標として用いることができる。「副詞的位置への生起」は、先述のとおり、「数詞+x」が数量詞であること、延いては「x」が助数詞であることを示す指標である。

ここで、もう一つ当該要素が名詞であることを示す指標を提案したい。双数を表す接頭辞「両」との結合可否を用いたテストである。次に示すように、接頭辞「両」は名詞に付加することはできるが、助数詞には付加できない<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> 東条(2012)の調査では、収集された数詞と直結する名詞 451 種のうち、漢語 346 種、外来語 71 種、和語 20 種、混種語 14 種であったという(東条(2012:128))。この調査では漢語が占める割合は 76.7%である。

<sup>10</sup> 正確に述べるならば、語根と名詞に付加し、助数詞には付加しない。語根に付加している例には「両家」「両雄」などが挙げられる。また、「御兩人」は助数詞「人(にん)」と同じ音が含まれているが、語根が結合しているものと考えられるため、例外とはならないと考える。



(18) 両社長、両力士、両キャプテン、両要素、両大学、両タイプ、…

(19) \*兩人、\*兩個、\*両つ、\*両匹、\*両羽、\*両台、…

(18)は数詞と結合しても副詞的な位置に生起できない名詞(=(16b))、(19)は拘束形態素の助数詞である。次に独立形態素の助数詞を見てみる。

(20) 両試合、両店舗、?両部屋、?両曲

(21) \*両つぶ、\*両たば、\*両箱、\*両パック、\*両種類、…

(20)(21)に示したように、名詞としての形態を維持したままの助数詞の場合はその許容度に大きな差がある。例を見る限り、語種の語形成力の問題ではないといえるため、ここではこれが、(21)がある種の名詞らしさを失っていることを示すものと考えられる。

では、(21)などが失っている名詞らしさとはどのようなものなのか。「両」が付加した名詞は、(22)のようにその下位語を要求する<sup>11</sup>。

(22) 以前は LDL と HLD の両コレステロール を合わせた「総コレステロール値」を診断基準にしていました。(Dole)

ここでは、「(18) → (20) → (21) = (19)」の許容度の差は、名詞が成すタクソノミーや指示の階層からの逸脱を示していると捉え、「接頭辞「両」との結合可否」が名詞と助数詞の連続的な関係性を示す指標となり得ると考える。

以上をまとめると名詞と助数詞の連続性は次の四段階に分けられる。

【表 3】名詞と助数詞の連続性

	形態素(例)	副詞的位置	数詞直結	独立性	「両」付加
A	-人、-匹、-個	○	○	×	×
B	粒、箱、種類	○	○	○	×
C	試合、店舗	○	○	○	○
D	社長、都市	×	○	○	○

## 5. まとめと課題

以上、本稿では、代表的な先行研究における助数詞の定義を検証することで、日本語における「助数詞」というカテゴリーの定義と範囲の検討を行った。本稿が提案する日本語

<sup>11</sup> 要求される下位語は明示的に示されない場合もある。また、「山田、鈴木両キャプテン」など、固有名詞が現れる場合もあるが、ここではそれらも含めて「下位語」としておく。

助数詞の定義は「任意の数詞と結合し、数量詞を成して副詞的な位置に生起できる語」である。

また、本稿では先行研究とは異なる形で名詞と助数詞の連続性を【表 3】に示した。本稿の定義に基づく A から C までが助数詞、D が名詞である。

【表 3】の B や C に属する語の一部は比較的若い助数詞であると考えられる。ここでの議論は、現段階では、日本語の助数詞に関する一つの見方を提示したにすぎないが、今後、個々の語を検討していくことで、日本語において新たな助数詞が誕生する過程を明らかにすることができると考えられる。しかし、それについては今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 天崎治(2004)「三兄弟と三人兄弟」「二横綱と二人横綱」数量詞の連体修飾構文について『日本語文法学会第 5 回大会発表論文集』pp.195-204 日本語文法学会
- 池上秋彦(1971)「助数詞」松村明編『日本文法大辞典』pp.331-332 明治書院
- 飯田朝子(1999)「日本語主要助数詞の意味と用法」東京大学大学院人文社会系研究科博士論文
- 奥津敬一郎(1969)「数量的表現の文法」『日本語教育』14,pp.42-60 日本語教育学会
- 東条佳奈(2012)「助数詞・準助数詞・疑似助数詞 一名詞と同形の助数詞をめぐって」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』pp.127-134 日本語学会
- 成田徹男(1990)「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27,pp.1-8 東京都立大学国語国文学会
- 西尾寅弥(1977)「助数詞」佐藤喜代治編『国語学研究事典』p.132 明治書院
- 峰岸明(1966)「平安時代の助数詞に関する一考察 (一)」『東洋大学紀要 文学部篇』20,pp.49-81 東洋大学文学部
- 峰岸明(1967)「今昔物語集における助数詞の用法 (一)」『文学論叢』35,pp.47-61 東洋大学国語国文学会
- Backus, Robert L. (1972) Two modes of counting in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*.1-2, pp.174-194, Los Angeles, University of South California.
- Downing, Pamela (1995) *Numeral Classifier Systems: The Case of Japanese*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- Kim, Alan Hyun-Oak(1995)Word order at the noun phrase level in Japanese: Quantifier constructions and discourse functions. Pamela Downing (ed.) *Word order in Discourse*. pp.199-246, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

#### 【用例出典】

朝日 : 朝日新聞 (聞蔵Ⅱビジュアル)

週刊 : 週刊朝日 (聞蔵Ⅱビジュアル)

AERA : AERA (聞蔵Ⅱビジュアル)

Dole : [http://www.dole.co.jp/5aday/about/column/column\\_050.html](http://www.dole.co.jp/5aday/about/column/column_050.html)